

アレクサンダー・ ガヴリリュク

Alexander Gavrylyuk Piano Recital
ピアノ・リサイタル



2023年2月21日(火) 19:00開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Tuesday, February 21, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

後援：オーストラリア大使館



AUSTRALIAN EMBASSY TOKYO
在日オーストラリア大使館

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op.27-2 「月光」

L. v. Beethoven: Piano Sonata No.14 in C-sharp minor Op.27-2 "Moonlight"

- 第1楽章 アダージョ・ソステヌート 1st mov. Adagio sostenuto
 第2楽章 アレグレット 2nd mov. Allegretto
 第3楽章 プレスト・アジタート 3rd mov. Presto agitato

シューマン：子供の情景 Op.15

R. Schumann: Scenes of Childhood Op.15

- 第1曲 見知らぬ国から／第2曲 珍しいお話／第3曲 鬼ごっこ／第4曲 おねだり／第5曲 満足
 第6曲 大事件／第7曲 トロイメライ／第8曲 炉ばたで／第9曲 木馬の騎士／第10曲 むきになって
 第11曲 びっくり／第12曲 子供は眠る／第13曲 詩人は語る
- No.1 Of Foreign Lands and People / No.2 A Strange Story / No.3 Catch-as-catch-can
 No.4 Pleading Child / No.5 Happy Enough / No.6 An Important Event / No.7 Dreaming
 No.8 By the Fire-side / No.9 Knight of the Hobby-horse / No.10 Almost Too Serious
 No.11 Frightening / No.12 Child Falling Asleep / No.13 The Poet Speaks

リスト：タランテラ（「巡礼の年」第2年補遺「ヴェネツィアとナポリ」より） S.162-3/R.10c-3

F. Liszt: Tarantella S.162-3/R.10c-3

from *Années de pèlerinage*, 2nd year supplement, Venezia e Napoli, No.3

* * *

ショパン：夜想曲 第8番 変ニ長調 Op.27-2

F. Chopin: Nocturne No.8 in D-Flat Major Op.27-2

ショパン：ポロネーズ 第3番 イ長調 Op.40-1 「軍隊」

F. Chopin: Polonaise No.3 in A Major Op.40-1 "Military"

ブラームス：間奏曲 Op.119-1, Op.117-3

J. Brahms: Intermezzo Op.119-1, Op.117-3

サン＝サーンス／リスト：死の舞踏 Op.40

C.Saint-Saëns (Arr. F. Liszt): Danse macabre, Op.40

出演者の希望により、当初予定のプログラムから一部変更がございます。

アレクサンダー・ガヴリリユク 2023年日本公演スケジュール

2月16日(木)	浜松	アクトシティ浜松	主催：公益財団法人浜松市文化振興財団
2月19日(日)	東京	サントリーホール	主催：公益財団法人東京交響楽団 ★
2月21日(火)	東京	東京オペラシティ コンサートホール	主催：ジャパン・アーツ

★ 原田慶太楼指揮、東京交響楽団との共演



©Marco Borggreve

アレクサンダー・ガヴリリユク (ピアノ)

Alexander Gavrylyuk, Piano

驚くべき技術を誇るピアニスト、アレクサンダー・ガヴリリユクは、そのしびれるような詩的な演奏で国際的に高く評価されている。1984年ウクライナ生まれ。7歳よりピアノを始め、9歳で初めてオーケストラと協奏曲を演奏した。1999年ホロヴィッツ記念国際ピアノコンクール第1位とゴールドメダル、2000年浜松国際ピアノコンクール優勝。2005年、世界的に有名なルーベンシュタイン国際ピアノコンクールにて、待望の金賞とベスト・コンチェルト賞を受賞した。

ノーブルで心に強く訴える解釈が評価されているガヴリリユクは、ますます多くのオーケストラと指揮者に求められており、その中にはニューヨーク・フィル、ロサンゼルス・フィル、チェコ・フィル、イスラエル・フィル、ワルシャワ・フィル、モスクワ・フィル、ロッテルダム・フィル、ロイヤル・スコティッシュ・ナショナル管、ルクセンブルク・フィル、N響、ボーンマス響、シンシナティ響、ハレ管、東京交響楽団、リール国立管、シュツットガルト・フィル等のオーケストラが含まれる。指揮者ではウラディーミル・アシュケナージ、ヘルベルト・ブロムシュテット、アンドレイ・ボレイコ、トーマス・ダウスゴー、ワレリー・ゲルギエフ、ネーメ・ヤルヴィ、ウラディーミル・ユロフスキ等と共演している。

2021-2022シーズンの主な活動には、サンディエゴ響、ダラス響、ベルゲン・フィル、アントワープ響との初共演の他、シカゴ響、シドニー響、ネザールランド・フィルへの再共演がある。

リサイタルではウィーン・ムジークフェライン、チューリッヒのトーンハレ、ジュネーブのヴィクトリアホール、ロンドンのウイグモアホール、アムステルダムのコンサートヘボウなどに出演しているほか、ヴァイオリンのジャンヌ・ヤンセンとは欧州の主要都市で共演を重ねている。

世界の一流音楽祭の多くに出演しており、ハリウッド・ボウル、ブラヴォー・ヴェイル・コロラド、モーストリー・モーツァルト、ルール・フェスティバル、キッシンゲンの夏国際音楽祭が含まれる。また、ロイヤル・アルバート・ホールでBBCスコットランド響と共演したBBCプロムスデビュー公演は、BBCプロムス2017の「エディターが選ぶトップ10」に掲載された。

13歳よりシドニーに拠点を移し、2006年まで滞在した。2009年、ウラディーミル・アシュケナージ指揮／シドニー響とプロコフィエフのピアノ協奏曲全曲を録音し、高い評価を受けた。最近では、ブラームスの「パガニーニの主題による変奏曲」とリストの作品を収録したリサイタルCDが広く評価されている。

シャトウクア・インスティテュートのアーティスト・イン・レジデンスを務めており、芸術顧問としてピアノのプログラムを主導している。また多数のチャリティ活動を支援しており、その中にはオーストラリアの若手ピアニストを援助、奨励するテーマ&ヴァリエーション・ヤング・ピアニスト・トラスト、カンボジアの子供達のために寄宿制教育施設を建設したオポチュニティ・カンボジアが含まれる。スタインウェイ・アーティスト。

ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第14番 嬰ハ短調 Op.27-2 「月光」

ドイツのボンに生まれ、ウィーンで世を去ったルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)のピアノ・ソナタのなかで、第14番は、第13番(Op.27-1)と共に「幻想曲風ソナタ」として書かれ、1801年に完成し、伯爵令嬢J.グイッシャルディに献呈された。自由な発想が大胆な形で現れたこのソナタは、3楽章から成り、「月光」の愛称で親しまれているが、これは、詩人のレルシュタープが第1楽章を、ルツェルン湖にかかる月の光にたとえたことに由来するという。

第1楽章 アダージョ・ソステヌート。嬰ハ短調、自由な3部形式。従来のソナタ形式の第1楽章とは異なり、静かで荘重な緩徐楽章としての役割を持つ。

第2楽章 アレグレット。変ニ長調、3部形式。愛らしい楽想と、生き生きとした動きが印象的。

第3楽章 プレスト・アジタート。嬰ハ短調、ソナタ形式。感情の激しい高まりを表したようなフィナーレ。

シューマン：子供の情景 Op.15

ドイツ・ロマン派の作曲家ローベルト・シューマン(1810～1856)は、20歳代の間はピアノ曲の創作に集中的に取り組み、その10年間に約30曲のピアノ曲を書きあげた。幼いころから文学に親しみ、文学の道に進もうとしたこともある彼のピアノ曲では、文学的な背景や標題性が、特色のひとつとなっている。

1838年に作曲された「子供の情景」は、シューマンらしい文学的なロマンティシズムを感じさせると共に、親しみやすいメロディにあふれたピアノ曲集であり、彼自身によれば、子供のころを回想している大人たちのために作曲されたという。それぞれに標題の付いた13の小曲から成るが、単独でも有名な第7曲「トロイメライ」は、ドイツ語で夢を意味する「トラウム」から派生し、「夢見ごと」とでも訳せる標題である。全13曲の内訳は、次のとおりである。

第1曲「見知らぬ国から」：ト長調／第2曲「珍しいお話」：ニ長調／第3曲「鬼ごっこ」：ロ短調／第4曲「おねだり」：ニ長調／第5曲「満足」：ニ長調／第6曲「大事件」：イ長調／第7曲「トロイメライ」：ヘ長調／第8曲「炉ばたで」：ヘ長調／第9曲「木馬の騎士」：ハ長調／第10曲「むきになって」：嬰ト短調／第11曲「びっくり」：ト長調／第12曲「子供は眠る」：ホ短調／第13曲「詩人は語る」：ト長調

リスト：タランテラ(「巡礼の年」第2年補遺「ヴェネツィアとナポリ」より) S.162-3/R.10c-3

ロマン派の作曲家フランツ・リスト(1811～86)は、超絶技巧を操る名ピアニストでもあった。彼の書き残したピアノ作品のなかに、恋人のダゲー伯爵夫人と共に各地を旅した印象などをもとに作曲した、4巻から成るピアノ曲集「巡礼の年」がある。この曲集に含まれる「第2年補遺：ヴェネツィアとナポリ」は、1859年に作曲された。ヴェネツィアやナポリにゆかりのある旋律を用いた3曲で構成されたなかから、今回演奏されるのは、第3曲「タランテラ」。ナポリ地方の舞曲「タランテラ」の速いリズムで進む技巧的な曲だが、中間部に現れる美しい旋律は、コツラウまたはボノンチーニの作とされる。

ショパン：夜想曲 第8番 変ニ長調 Op.27-2

ポーランド出身の作曲家フレデリック・ショパン(1810～49)は、従来のジャンルや様式について、表現の可能性を深く追求したピアノ曲を、数多く書き残した。夜の夢想的な気分を表す夜想曲(ノクターン)は、アイルランド出身の作曲家ジョン・フィールドが創始したと考えられている様式である。ショパンはこの様式に基づいて、繊細優美でロマンティックな味わいを盛りこんだ夜想曲を、21曲ほど作曲した。1835年に作曲され、ダポニー伯爵夫人に献呈された第8番は、夢みるような甘美な情緒を含み、また、コーダの美しさも印象に残る夜想曲である。

ショパン：ポロネーズ 第3番 イ長調 Op.40-1 「軍隊」

ショパンは、祖国ポーランドの素朴な舞曲であるポロネーズを、芸術作品としての価値を持つものにまで高めた。Op.40としてある2曲のポロネーズは、1838～39年に作曲され、ショパンの友人のフォンタナに献呈された。Op.40-1(第3番)は、勇ましく堂々とした軍隊の行進を表しているような主題から、「軍隊ポロネーズ」と呼ばれて親しまれている。

ブラームス：間奏曲 Op.119-1

渋く重厚な作風を特色とするドイツ・ロマン派の作曲家、ヨハネス・ブラームス(1833～1897)の作品のなかで、晩年に書かれた4種のピアノ曲集(「7つの幻想曲」Op.116、「3つの間奏曲」Op.117、「6つの小品」Op.118、「4つの小品」Op.119)は、寂寞としていて、独特の枯れた味わいを含む。これらの曲集は1892年の作と考えられており、個々の小品は簡潔な形式でまとめられているが、晩年のブラームスらしい成熟した作曲技法も注目される。また、その曲想には、彼自身の感情の吐露、たとえば回顧、躊躇、諦観などが、反映されていると感じられよう。

「4つの小品」Op.119の第1番としてある「間奏曲」は、アダージョ、ロ短調で書かれている。すすり泣くような、しかし美しい響きを持った、冒頭の分散和音が印象的であり、その曲想をクララ・シューマンは、「灰色の真珠」と、たとえたという。

ブラームス：間奏曲 Op.117-3

Op.117は、3つの「間奏曲」から成る曲集であり、その第3番は、アンダンテ・コン・モート、嬰ハ短調で書かれている。暗い表情がきわ立ち、不安と焦燥を交えたような響きに包まれた1曲である。

サン＝サーンス／リスト：死の舞踏 Op.40

原曲は、フランスの詩人アンリ・カザリスの奇怪な詩にそってカミュ・サン＝サーンス(1835～1921)が作曲した交響詩「死の舞踏」Op.40である。真夜中の墓場で骸骨が踊る不気味なワルツが、「怒りの日」の旋律も伴って展開するこの曲を、リストは、技巧的なピアノ曲に編曲した。なお、往年の名ピアニスト、ホロヴィッツによる、さらに華やかな編曲版もある。